シリーズ・開業

# ―本当に―開業しました

川口博史
金沢皮膚科
（横浜市金沢区）

昨年の「神皮12号」で開業医代行業のことを書かせていただいた。あの原稿の脱稿時にはかわぐち皮フ科院長が回復しつつあり、すぐに定職がなくなるのがみえていたので自分のクリニックを作る決心をした。「開業にまつわる諸々の雑務を経験していない者はいっちょまえの開業医を名乗る資格はない」と人にいわれたこともあり、じゃあやってやるわい！という勢いもあってすぐに場所探しを始めた。以前は前勤めていた病院近くのS市でやろうかなと漠然と考えていたのだが、考えるところあって横浜市南部地域での場所探しを始めた。横浜であるから当然先輩たちがたくさんいるし、どうせやるなら駅から近いところとか、駐車場が隣接してとか、希望の条件を考えるといい物件がそう簡単にあるはずもない。医業コンサルタントにしばらく探してもらっていたのだが、結局知人の父親が建設中のマンションの１階テナントをオーナーから直に相談されてそこに決めた。ちょうど金沢文庫と金沢八景の中間地点だからそれぞれの駅前の先生達とは競合しないだろうと軽く考え、また駅から10分以上も歩くくらい不便だし余生をのんびり過ごすにはあまり混まない方がいいだろうと、半ばやけっぱちで準備を開始した。満を持して準備を始めたわけではないので資金をがっちりため込んでいたわけでもなく、かといって実家が商売をやっていたので借金は絶対してはならないという家訓もあり、内装は汚れにくく安く上げるをモットーにしゃれた間接照明や曲線状のカウンターなど凝った造りは一切なく、けちけちと準備していった。ところが新築マンションでしかもスケルトン状態であったため、まず空調の新設に想定外の出資が必要になり、なんだかんだと資金がどんどんなくなり、最終的にはいくつかのリース契約をすることとなった。直に比較したことはないが同時期に開業したO先生やT先生のクリニックより絶対見劣りするだろうという変な自信がある。開業前夜まで工事が入ってぎりぎりの開院だったが、職人さん達は皆さんよくやってくれて、最終的にはそれなりに小綺麗なクリニックとなった。

開業２週間前から、看護師、事務員達と準備を始めたが、１人の事務員が顔合わせをかねて半日勤務しただけで「自信がないからやめます」といってやめてしまった！　何とか代替の職員に来てもらい事務方はうまく回っているが、今度は看護師が開業後２週間でやめてしまった。これにはさすがにまいった。皆さんもご存じのように医療事務は結構たくさんの人材が埋もれているが、看護師はそう簡単に集まらないものである。初めにS市でやろうかと考えていたのもその辺の理由があったのだが、今さらそんなこといっても仕方ない。とにかく知り合いに片っ端から連絡して、相模原病院の元看護師で結婚退職していた１人が期間限定であるが手伝ってくれることとなった。彼女の都合の悪い日は別の友人たちが手伝ってくれ、何とか体裁を保つことができた。

平均年齢25歳！のスタッフです

相模原時代に病院の人たちと連日飲み歩いて培った人脈がこんなところで役に立つとは、持つべきものは飲み友達であると痛感した。そんな綱渡り人事ではあったが初めての夏を何とか乗り切ることができた。お陰様で瞬間的には待合室が一杯になるときもあるが普段はまだガラガラで、特に昨年は７、８月に台風の接近が２回もあったおかげでその日は開店休業状態であった。誰もいないと部屋の電気を消して光熱費を切りつめながら暗い気分で診療していた。医会の感染症サーベイランスのときも前の週は該当症例が一杯来たのに、当日は患者が少なくて恥ずかしいくらいの数字しか提出できなかった（来年はがんばるので見捨てないでください＞向井先生）。

当初はポスティングしたリーフレットを参考に受診する地元の人ばかりだったが、段々知人の紹介で来院する人が増えてきたので、それなりに口コミ効果があるのかなと思っている。さらにかわぐち皮フ科で診ていた患者や、驚くことに相模原時代の患者も10数人は通院してくれている。最近は拙作のホームページを見て来院する人も増えてきた（http://www1.seaple.icc.ne.jp/k-hifuka/）。いじり始めると凝り出すたちなので、ちょこちょこと更新するようにしている。おかげで毎日「ひろしです」のネタ探しに忙しくなってしまった。最近は昔追いかけていた鉄道の趣味も復活していて、高校時代の鉄研仲間も皆子供に手がかからなくなった世代になり一緒に撮影に出かけるようになった。またいつの日かクリニックに鉄道模型を走らせてやろうかとも目論んでいる。休診の水曜日は沖釣りにも行けるので趣味生活は充実している。そういう意味では人生のQOLは勤務医時代よりも改善しているようだ。原稿を書く機会も減ったし次は「私の趣味」の原稿を目指そう！

臨床医学というのは人と人とのふれあいで成り立っているのは当然であるが、今回クリニックを立ち上げるに当たっては、関わってくれた設計士、建築職人、スタッフ、皆いい人たちに巡り会えたことに感謝してあまりある。秋になり新しい看護師を採用することもできた。これからは来院してくれる患者さん１人１人との出会いを大切にして、自分のペースで無理せず楽しく皮膚科診療をしていきたいと思う。どうぞよろしくお願いいたします。

# 落下傘的開業

**小林誠一郎**
こばやし皮ふ科クリニック
（藤沢市）

このたびは神奈川皮膚科医会に入会させていただき誠にありがとうございました。平素より医会の先生方にはご厚情を賜り御礼申し上げます。

平成16年11月１日に藤沢市にて開業しました。場所は江ノ電藤沢駅より徒歩１分ほどの江ノ電沿いにあるビル内の３階です。ちょうど高架線の電車と同じ高さです。

私は、平成６年に慶應義塾大学を卒業後、皮膚科学教室に入局し２年間の研修を経て、埼玉医科大学総合医療センター、平塚市民病院に配属され平成11年に教室にもどりました。大学では診療・研究・教育以外にも、ちょうど第100回の日本皮膚科学会総会の記念切手準備にも携わるなど貴重な経験ができました。平成15年に稲城市立病院に出向した後、開業に至りました。

記念切手については陰ながらも大変だったので古い話ですが広報しておきます。第100回日本外科学会総会の記念切手では「華岡青洲とチョウセンアサガオ」と無難なテーマがありました。しかし皮膚科では一般の人にとって有名な人物が存在しません。また、植物は多く関係するものの、かぶれる、皮疹の名前になっているなどネガティブな関係のためテーマに使用できませんでした。病気に関係するものはその病気の人の尊厳にかかわるとのことで使用できないきまりがあります。切手のデザイン担当の技芸官は、テーマが欲しくてもなかなかいいものがなく困っておりました。私は技芸官の欲しいという資料集めに奔走し、結局皮膚の紋理を幾何学的に表現

し、学会のロゴマークを中心に配したものに決まりました。原画を描いたのは星山理佳氏で、５段階に移り変わる色調を使うことで変化をつける手法は切手では初めてでありきれいな仕上がりでした。全色そろっているシートならば切手価値も他の記念切手よりは高くなるのではないでしょうか。

開業については、あるとき学生時代に同じクラブ仲間で今は眼科の医師よりクリニックビルでの開業の話がありました。私一人であればこのまま勤務医で転々と場所を変えてもとくに問題はありませんでしたが家庭のことも考え前向きに検討することになりました。

父は整形外科医で未だに勤務医ですが、一つの病院に20年ほど勤めておりました。田舎では中規模以上の病院に10年もいれば町ではほとんど誰でも知っています。どこに住んでどんな子供がいるかも町の人に隠せるものではありません。それが良いか悪いかは別として、まさに地域に密着しているため、診る人も知り合いつながりです。友達からは「おまえのおやじに診てもらったけどひどいんだぞ。痛いって言っているのにグイグイ押すんだから」と言いつけられます。父に報告すると笑って「そうか」と言っておりました。子供の頃はこうした環境が普通に思っていましたので、病院を転々とする生活と患者さんの「また（担当医が）替わるのですか」という言葉にはいつも疑問がついてまわりました。

開業前の用意は大変だという人もいらっしゃいますが、どんなクリニックにしようかと考えて実際にできあがってくると非常に楽しいとわかりました。機能的設備的な観点はもちろん自分で考え、内装の配色など苦手なところは妻に相談して主婦からみても合格点をもらえるように努力しました。あとは肝心な診察・治療と応対です。

藤沢市には地盤的につながりがなかったためいわゆる「落下傘的開業」です。稲城の病院のそばならもっと楽にスタートできたのにとも言われたことがありました。ゼロからのスタートに不安がないわけではありません。日常診療に往診と働き、町内会にも出席します。

診断ができても治らないと来てもらえませんので、毎日が今までやってきたことの総試験のような心境です。患者さんの希望とこちらの希望とは必ずしも一致しません。そのときどこまで無理せずこちら側に引っ張ってこられるかが勝負の分かれ道です。今までは大病院という表看板がある程度支えてくれましたがここではまさに「偉そうに言っているけど、あんた誰？」の世界で何の後ろ盾もありません。治ってきたときだけ、ようやく患者さんの顔に信頼の色が見えてくるのがわかります。そのとき「ほ～らね治ったでしょ」とは言わずに心から「良かったですね」と言います。

午後外来や土日診療を行っていると、今まで会えなかった「忙しい人たち」層の患者さんに会うことができます。この層はまさに貴重な時間を費やしてまでいらっしゃるので待ち時間・治癒率（？）・費用に厳しいと考えます。ここでも勝負しどころです。

今後医療制度的には厳しい状況が予想されますが、どう対処していこうかと考えることで益々やる気がでてくるように思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

待合いから見たクリニック内

# 開業当初において

**戸澤孝之**
戸沢皮膚科医院
（小田原市）

慈恵医大を非常勤となり、すでに高齢であった父の後を継ぎ開業したのは、平成３年です。すでに14年が経ちました。診療所は小田原市にありましたが、東京の自宅から通うことにしました。小田原市が故郷ですのでいずれは帰らなければと思いつつ、現在もなお東京から通勤しております。

開業においては、手続きはすべて父が手伝ってくれましたし、また、開業すれば覚えなくてはならないレセプトについても、すでにベテランの医療事務スタッフがおりましたので、なんの苦労もありませんでした。

大学ではマイペースに診療していた私ですが、最初は戸惑いました。なぜなら診療所で受診なさる患者さんのほとんどは、父が診ていた患者さんですので。

診療しているのが父でないと知った患者さんの顔には、口にこそ出さないものの「あれ、今日は医者が違うな」という表情がありありと見受けられます。そして、私の前に座るや否や、「いつものお薬で結構ですから」とおっしゃいます。もちろん「なかなか治らなくて困っています」と長々と訴える患者さんも多くいらっしゃいました。しかし、そのような患者さんですら、私が「では、お薬を変えてみましょう」と言うと、「いや、今までのお薬でいいですよ」との答えが返ってきます。私の治療では信用出来ないと思われたのでしょうか。患者さんの私への最も多い要望は、「先生、あまり来られないので、お薬を多く下さい」ということだったかもしれません。

今では、ほとんどありませんが、開業当初には次のようなことを経験しました。私が「他科で何かお薬をもらっていますか」と尋ねると、患者さんは「沢山のお薬をもらっています。だけど、これとこのお薬は医者がくれるのでもらっていますが、効かないので飲んでいません」とおっしゃいます。患者さんは医師が処方した薬を素直に飲んでくれるものだと信じきっていた私にはカルチャーショックでした。

切開などの処置や小手術に際しては、私の治療に不満を持った患者さんも少なくなかったのではないかと思います。それというのも、私が傲慢であったということに他ならないのですが。

発赤、腫脹の顕著な炎症性粉瘤の患者さんは、当時からしばしば受診なさいました。これらの患者さんに私が「切って膿を出しましょう」と言うと、「えぇー切るんですか、痛いのでしょう」と多くの患者さんが大学病院で診療していた時とは比べ物にならない位、過剰な反応を示します。外科ではなく皮膚科の開業医を受診なさる患者さんです。少し考えれば、切らないで治療をしたいという希望が多いと推測出来たはずです。それでも、当時の私は切るのが当然というふうに、必要なことだけ説明し、さっさと処置を済ませていました。そんな後では患者さんにいろいろ言われました。「こんなに麻酔が痛いとは思わなかった」、「風呂に入れないという説明を受けたが、シャワーもダメだとは思わなかった」、「消毒に通いなさいとは言われたが、明日、明後日では都合が悪い」、「処置後のガーゼがこんなに大きくなるとは思わなかった」等々。

話は飛躍しますが、先日、在局中お世話になった慈恵医大の新村眞人名誉教授のゴルフコンペに参加しました。コンペの前夜祭で新村先生は「診断というものは常に100％正しいことはあり得ない。しかし、患者さんに対しては、『診断に間違いはありません』と言ってあげ、安心させてあげることが大切なんだ。いろいろなことを言い、かえって患者さんに不安を与えてしまうのは避けるべきだ。例え誤診となったにせよ、少ない頻度ならば、その責任は医師である自分がとればよいのだよ」とお話しなさいました。その時は内心、新村先生だからこそ言える言葉だと思って聞いていましたが、こんな私にも患者さんから「先生のお話を聞いて安心しました。来て良かったです」と言ってもらえた経験はあります。開業医としてどれだけ地域医療に貢献出来るかはわかりませんが、出来るだけ多くの患者さんから、

「診てもらって安心しました」と言っていただけるような医師でありたいと思います。

# 開業のご挨拶

**高橋さなみ**
ひぎりやま皮ふ科
（横浜市港南区）

神奈川県皮膚科医会の諸先生方、大変お世話になります。平成17年６月より横浜市港南区日限山（ひぎりやま）にて開業するのとほぼ同時に、遅ればせながら神奈川県皮膚科医会に入会させて頂きました。先日の県皮膚科医会例会は恥ずかしながら初めての参加でしたが非常に勉強になりました。さらにその後の懇談会ではいままでなかなかご挨拶する機会がなかった諸先生方とお話することができ、とても充実した１日でした。もっと早くに入会させて頂くべきであったと心から思った次第です。

私ごとですが、平成２年に横浜市立大学を卒業し、学生実習の時に患者さんにとても温かくていねいに接していらした中嶋弘先生のお人柄に感銘を受け、２年間のローテートの臨床研修医を経て皮膚科に入局いたしました。いまでも何でもすぐにメールで相談してしまう高校時代からの先輩である山川有子先生（現・横浜市立大学附属市民総合医療センター部長）がいらしたこともきっかけになったと思います。その後出向した横浜市立市民病院では部長の毛利忍先生に皮膚科のノウハウをまさに手とり足とり教えて頂きました。この時はただでさえお忙しい毛利先生を遅くまでひとりじめにして教えを乞い、ほぼ１か月毎に地方会や研究会で発表することができました。その後出産をはさみ、以後市大浦舟病院（現・横浜市立大学附属市民総合医療センター）に４年間、横須賀共済病院に４年間勤務いたしました。この間は子育てと目の前のあまりに多い患者さんの診療に追われ、毎日バタバタと走り回って過ごしておりました。一昨年の11月、ふとこのままでいいのかと立ち止まるきっかけがありました。私は古くからの友人には「一本気」といわれる性格で一度思い込んだらもう止まらないところがあります。まさに勢いで開業を決意しました。

私がこの日限山に越してきてから６年目になりますが、引っ越してきた当初より自宅のすぐ近くの医療ビルの一画がずっと医院募集中になっていましたのでとりあえずそこに問い合わせてみたところ、話がとんとん拍子に進んでしまいました。急なことで医局にも多大なご迷惑をかけてしまい本当に申し訳なく思っています。この場をかりておわびいたします。

さて今までは小学校に出かける娘より先に出勤していましたので、開業してはじめて「いってらっしゃい」と娘を見送ってやれるようになりました。また愛犬（チワワ）がうるうるした目で散歩をせがむので、時間がない～とあせりながら出勤前に散歩にいくはめになりました（今までは朝から留守番が当たり前でしたのに、犬もせがめば何とかなりそうであることがわかってしまうようです）。クリニックまでは自宅から歩いて５分ですのでさぞかし朝はゆっくりできるかと思いきや、結局毎日遅刻しそうになりバタバタ走っています。

勤務医時代は平日の帰宅もかなり遅く休日も交代で出勤しておりましたので、とにかく開業してからは時間に追われないようにと考え、主人も働いていることですし生活費は何とかなるだろうとの甘えか

明るいスタッフとともに

ら、土曜の隔週（２・４）、月曜の午後、木・日・祭日は休みというやや贅沢ともいえるスケジュールで開院しました。当初は時間があればさぞかし家事もはかどるかと思っておりましたが、お恥ずかしいことに家のなかは全く片づかず、最近それはいくら時間があっても同じだということに気付きました。このところは夏も過ぎましたので、もともとさほど多くはなかった患者さんがさらに減ってきました。患者さんが少ない日はなかなか時間がたたずややわびしい気持ちになりますが、そのぶんひとりひとりに丁寧に説明することができます。勤務医時代の忙しい診療では、患者さんが診察室にはいってくるやいなや、気がせくあまりに「きょうはどの薬がないですか？」とたずねてしまい、“私は薬屋さんか？”と悩むこともありました。開業してすぐの時、今までの経過を長々話すご年配の患者さんについまくしたてて説明してしまい、「先生は早口すぎてよくわからない」とお叱りをうけましたので、それ以降は極力ゆっくりわかりやすく説明するように心掛けています。クリニックは最寄り駅の横浜市営地下鉄下永谷駅からでも、だらだらとした登り坂で徒歩８分ほどかかり、決して便利とはいえない立地ですが、横須賀共済病院でみていた患者さんが何人かわざわざ地図をみながら足を運んでくださったりすると、とてもありがたくうれしく思います。開業した以上は当然一生ここでやっていくのかと思いめぐらすと、もともと飽きっぽい性格ですのでやや不安もありますが、開業医としては今まさに駆け出しですので気をひきしめ、今後県皮膚科医会に参加することで一層勉強させて頂き患者さんにより満足して頂ける医療を提供できるようがんばっていきたいと思います。また諸先生方と交流の機会もふえれば大変うれしく思います。是非今後ともご指導くださいますようどうぞよろしくお願いいたします。

# 当直ねえ、会議もねえ、責任とるのは俺しかねえ

**高橋泰英**
高橋皮フ科クリニック
（横浜市中区）

吉幾三ではないけれど、勤務医から開業医への変化はそういうことだと思います。３年前、そろそろ当直が堪える身になり、実りなきだらだら会議にも飽き飽きしていた頃、親しかった整形外科医が開業することになりました。それまでは彼を中心に映画の会やRockの会（演奏ではなく昔のRockについてクイズを出し合い、それを肴に酒を呑む会）、月例麻雀会と院内の私的生活は結構楽しかったのですが、それらが無くなると病院生活が益々色褪せるだろうと想像されました。その頃彼からゴルフに誘われました。ボウリング（こちらも非常に下手）のようなスコアのまま上達しないため３年ほど止めていましたが、これが最後だと思い誘いを受けました。そのグリーン上で、彼が開業する医療ビルで皮膚科も募集しているがどうかという話になりました。元々65歳の定年まで勤め、その後はその時考えようという計画性のない計画を立てており、開業する気は全くありませんでした。しかし当直・会議・友人の退職に加え、勤務先の横浜赤十字病院は別名横浜赤字病院と呼ばれ、常に存続の不安があったため、ほぼ即決してしまいました。グリーン上の決定というわけです。普通は場所も物件も色々探して大変なのに、後から立地条件の

笑顔が魅力のスタッフ一同

確認調査などをしただけで全く幸運でした。場所は前任地の隣駅でした。

今まで勤めた病院は全て私が辞めてから新しくなり、私自身は古い施設でしか働いたことがありませんでした。今回が最初で最後のチャンスです。働きやすく見た目もきれいな医院を作るべく設計にはこだわりました。開業まで１年近くあり、時間は十分です。費用は平均的だと思いますが満足のいくものになり、患者さんからもよく「きれいなビョウインですね」と言われ悦に入っています。

次に考えたのは電子カルテです。２、３年前に開業された杉田泰之先生からその良さを聞いていましたが、機械は全く苦手でパソコンはワープロと患者の写真・病理のデータ整理だけ、今も私的なパソコンはただのテレビに堕しインターネットやメールは繋がっていません（IT委員の浅井俊弥先生から叱られています）。ですから多少不安でしたが、いざ使ってみると大変便利で、もう電子カルテ無しは考えられません。とはいえ開業初日は大混乱。開業３日間だけメーカーから派遣されたサポーターに、逐一確認しながら操作しなければなりませんでした。プログラムの準備に１ヶ月以上かけたのにいざとなると全く使いづらく、それからは毎日改良を繰り返しました。改良は私でも一人で簡単にでき、今でも時々マイナーチェンジしています。電子カルテの奴隷になったような気分だったのが、１カ月後には私の方が奴隷をこき使っている快感を覚え、さらには無二の良きパートナーとなりました。

医療機器ではデルマレイで悩みました。先輩方には不要という意見が多かったのですが、前の病院から引き続き通いたいという乾癬患者のため対費用効果は度外視して購入しました。ところがインターネットや医療機器メーカーへの問い合わせで、ナローバンドUVBの存在を知り遠方から来院する方が結構いました。あまり遠方の方は長続きしませんでしたが、乾癬以外にも有効な疾患が多く、購入して正解でした。

開業したら必ずやりたいと思っていた事が２つありました。全例（鱗屑や小水疱などのある初診例）直接鏡検と初診時の軟膏処置（患者さんに任せると薬の使用量が極端に違うので絶対必要）です。皮膚科診療の理想だと思うので、健保審査員の先生方、どうぞご理解いただきたいと思います。

開業して気づいたのは、病院と比べて患者さんとの距離が近いということです。以前なら患者さんは他の医院を「○○先生」「△△医院」と呼びましたが、今は「◇◇さん」と呼ぶ事が多いので驚きました。それだけ開業医は地元住人の間に溶け込んでいるのですね。また患者さんが親しげだしとても感じがいいのです。よく考えてみると自分自身も病院勤務時代よりずっと感じがいいのでした。大学ではよく患者と喧嘩しました。病院勤務では丸くなったつもりでしたが、今思うとまだまだ無愛想だったかも知れません。自分の理想とする体制で、ほぼ思う通りの診療ができている今は、営業スマイルをしているつもりはないのに自然に笑顔になっているようです。

これからも患者さんには必ず笑顔で帰ってもらうのをモットーにやっていきたいと思います。